資料－３

平成１９年９月洪水

新聞記事

北上川増水、厳重な警戒

各地で上昇、危険水位に

盛岡市など県内陸部は17日未明から、秋雨前線の影響に伴う雨に見舞われた。同市内では床上浸水、道路や稲刈り前の田んぼの冠水など被害が出たほか、河川が各地で増水。北上川の朝取橋では避難判断水位を突破するなど危険な状況が続いている。木賊川ではほんらんの恐れが出ている。土砂崩れも発生しており、県と盛岡地方気象台は同市や八幡平市、雫石町、紫波郡矢巾町、滝沢村などに土砂災害に関する警戒警報を発表し注意を呼びかけている。雨は18日中まで降り続けると予想され、引き続き河川の増水や浸水、土砂災害に厳重な警戒が必要だ。

増水し危険水位にせまった北上川(朝取橋)（17日午後8時すぎ）

岩手河川国道事務所によると、北上川の盛岡観測所で午後7時前12・62㍍に達し、避難判断水位の2・80㍍を超えた。紫波町の紫波橋観測所では午後7時50分に水位が4・43㍍に達し危険水位の4・40㍍を超え、さらに上昇を続けている。北上市の馬山観測所でも午後7時で水位が4・30㍍に達し危険水位を超えている。

各地で消防団が出動し厳重な警戒が続いている。

盛岡市は大雨洪水警報発令に伴い17日午前8時過ぎに災害警戒本部を設置。午後3時前には災害対策本部に切り替えた。

中太田では国道46号バイパスと交差するアンダーパス部分の市道が冠水し、付近の用水路から水があふれ、低地にある市道に流れ込んだ。

市道路管理課が排水ポンプを設置し、午前7時台には当時の午前7時台には軽自動車1台が水に浸かったまま放置されていた。その後軽自動車は引き上げられたものの、付近からの体験の話は止まらず、通行止めが続いた。

周辺は田んぼが広がっており、稲刈り時期を迎えていた。市道に近接する田んぼでは16日から稲刈りを始めたばかりだったという。

所有する農家の女性（79）は「こんなの初めて。機械で刈り取るからクロ（あぜの草）を刈っていったが、このまま水があふれ続ければクロが流されて抜きされてしまう。水に浸ったので出穂が心配だ」と話し、家族とともに刈り取った稲を運び出す作業に追われた。

明けは未上浸水が一時あったが、午前8時すぎまでに排水作業をすませ、浸水部分の消毒作業も行われた。

盛岡地域では雫石町御神坂の県道網張温泉線も雷雨警報を受け、事前に交通通行止めとなったのをはじめ、矢巾町の下田工業団地南側のマンホールから雨水がふれ出し、建物などに被害が及ぼないよう排水作業が行われた。

駅西通2丁目に避難勧告

盛岡市は御所ダムの放流により増水が見込まれるとして、盛岡駅西通2丁目1番の15世帯30人に17日午後6時18分、避難勧告を発令した。避難場所は同市盛岡駅西通のマリオス・地域交流センター1階1・2会議室に設けられた。松川にはんらんの恐れがあるとして、玉山区川崎の3世帯、13人にも避難勧告が出た。

乙部川あふれ住民が避難

盛岡市乙部地区では、乙部川の水があふれ、北上川に近い水田などが冠水した。盛岡市は午後6時15分、市営法領団地（青葉町、136人）に避難勧告を発令した。

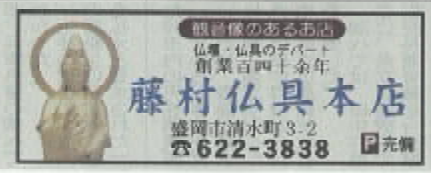
避難場所は乙部地区コミュニティ消防センター、乙部老人福祉センター、旧乙部小学校で、松川の水位が上昇した。

消防センターに就学前の幼児と一緒に避難してきた母親は「雨で家にいたが午後3時ごろに川の水があふれ心配だった。逃げられなくなるのも怖いので避難することにした」と話していた。消防団によると同地区に避難勧告が出されるのは聞いたことがないという。

上鹿妻で住宅1棟床下浸水

県様台防災室によると、盛岡市上鹿妻の住宅1棟に床下浸水の被害が出た。同室の午後5時現在の被害まとめでは盛岡市、北巻市で床上2棟、床下3棟の浸水、非住家8棟にも被害が出た。

道路被害では、葉の県道盛岡雫石温泉線が計2カ所で土砂崩落が発生し、当初の片側通行から全面通行止めになった。国道396号が路面冠水で、主要地方道盛岡東根線が土砂崩落でそれぞれ片側通行になった。



2007年9月19日　岩手日報　朝刊　25面

収穫迎えた農家直撃

県内大雨被害

水稲、大豆など冠水

品質低下や収量減懸念

収穫を間近に控えていたのに、一夜明けた十八日、農家らは冠水した水田や畑などと農作物の被害状況の確認に追われた。稲は倒れて重く実った穂が泥水に漬かった地域もあり、大豆や野菜も冠水による品質低下、収量減が懸念される。実りの秋を迎えた矢先の大雨被害に農家は肩を落とした。

【本紙は1面に】

台風9号に続き冠水した大豆畑。農家は「今年の収穫はもう駄目だ」と肩を落とす＝18日午後3時45分、奥州市前沢区

県農林水産企画室によると農作物の冠水被害は同日現在、内陸部を中心に十七市町1884ヘクタールで発生。まだ水が引かない地域も多く、被害は増えると見込みだ。

一関市は北上川の増水地方の農地がほぼ冠水。里の農業男性(73)は「冠水した米は残念だが、道路のおかげで被害が食い止められ、家がすくわれたと納得するしかない」と話した。

一関市沖田神社の水田に植えつけた同市山目の小岩典夫さん(76)は「今日中に刈り取りできると思っていただけに残念」。同市千厩町の農業男性(70)は「冠水した米は残念だが、道路のおかげで被害が食い止められ、家がすくわれたと納得するしかない」と話した。

花巻市でも北上川沿いの台風谷地八重畑、八幡地区などで水田や畑が冠水。花巻農協高農生活部の伊藤潤部長は「台風9号の被害が少なくほっとしていた直後、一〇〇年以来の大きな被害になるかもしれない」と対策を協議した。

一戸市は浄法寺地区を中心に水田が冠水をかぶった。安比川沿いの水田約4・5ヘクタールを栽培する高橋寿男さん(69)は「5ヘクタール以上が水に覆われ、半分以上は収穫できない。手間暇かけて育てたのに残念だ」と表情を曇らせた。

ほかの農作物の被害も大きい。奥州市江刺区の岩手ふるさと農協管内では、果樹一の出荷量を誇る八重に危惧的な被害が出た。北上川河川敷にある同市前沢区の新田地区の大豆畑5ヘクタールは冠水にのみ込まれ、管理する農業男性(58)は「さやの中に水がたまってもう駄目だ。今年の出来は最悪だったのに、すべて終わりだ」と肩を落とした。

出荷時期を迎えている北上市の二子さといもの畑は、産地の同市二子町で地域の畑の約半分が冠水。水に強い作物で品質低下の影響は少ないとみられるが、北上市農協北部営農センターの小野寺駐在部長補佐は「すっかり水をかぶった畑も多い。今は雨がやむ事を祈るばかり。収穫の遅れを心配する」。

奥州市江刺区は、愛宕、和賀地区のリンゴ園約8・1ヘクタールが冠水した。同市手工業農協によると冠水に漬かった果実は腐るため、捨てるしかないという。約80ヘクタールの同区稲瀬の農業組合長佐藤さん(65)は「樹高の半分くらいまで水が漬かった。これほど生育時期に響くとは思わなかった」と嘆いた。

砂鉄川右岸堤防で発生した漏水を防ぐため作業に当たれる消防関係者＝18日午後7時半、一関市川崎町門崎

北上川から逆流、堤防漏水

一関・川崎　藤沢の支流　水位の上昇で圧力

東磐井地方は十八日、雨はほとんど降らなかったが、北上川の水位が上昇した。一関市川崎町千厩町前の水位（はんらん危険水位8・7メートル）が二後五時に10メートル近くに達し、支流の同市川崎町の砂鉄川、千厩川、藤沢町の黒沢川逆流。支流の堤防十数カ所で漏水が発生した。

漏水は午後三時半ごろに警戒水位の9・5メートルを超えた黒沢川の同年約十カ所で発生。砂鉄川でも少なくとも石伝で四カ所で発生し、消防団員らが漏水防止作業に当たった。

岩手河川国道事務所一関出張所によると、河川の水位上昇で堤防に圧力が加わり、水が漏れたという。山中匡技術課長は「一度出すれば大きな被害になる」とし、引き続き監視の目を光らせる。

消防出張所関係者によると、堤防漏水は一〇〇二年七月の台風8号以来。「今月上旬の台風9号による大雨で堤防の土がゆるくなっていた可能性もある」と指摘する声も聞かれた。

水稲や大豆　排水徹底を

県が農作物技術情報

県は十八日、大雨による冠水に関する事業対策の農作物技術情報外を出した。冠水した水稲や大豆、野菜の排水の徹底など被害軽減策を呼び掛けている。

県庁内農業改良普及センターによると、水稲は穂が付き始めた時期で、冠水が続いた場合は直ちに起こして支柱などで支える。葉や茎に泥が付着している場合は、水をかけて洗い流す。

野菜は株が倒れた場合、根元に土を寄せるなどして支える。葉や茎に泥が付着している場合は、水をかけて洗い流す。

刈り取り適期を迎えた大豆は、さやが乾いてから刈り取り、速やかな排水が必要。根腐れなどによって品質低下がみられる場合は収穫時に分けて保管を。

大豆は、冠水した地域は排水が悪く、病害虫が入りやすくなり、速やかな殺菌剤の散布が求められる。

盛岡の男性も不明

県内大雨 2人目

一関遊水地「泥の湖」に

北上川が増水し、大量の水が流れ込んだ一関遊水地。18日午後2時40分、一関市興川の興章神社付近から撮影

交通乱れ 警戒続く

県内は大雨をもたらした前線は十八日南下、内陸部の雨は上がったが、県南部の洪水警報は継続され警戒が続いた。田畑の冠水や土砂崩壊による通行止めなど大雨の「つめ跡」は各地に残り、避難指示・勧告が解除されない地域も。一関遊水地は北上川から大量の水が流れ込み、一面泥状態。盛岡市では同日午後、近くの川に出掛けた男性が行方不明となった。今回の大雨による行方不明者は二人目。大雨に乱れた鉄道は運休や遅延が相次ぎ、延べ二万五千人以上に影響した。

【関連記事5、24、25面に】

降りはじめから十八日午後二時までの総雨量は花巻市東和町土沢で三〇〇ミリ、四和町長石で二八〇ミリ、雫石町長山で二七六ミリ、紫波町佐比内で二七一ミリ、盛岡で二〇六ミリなど。同

ゲート手前まで大量の流木やごみが覆われた四十四田ダム。撤去作業には長期間を要しそうだ＝盛岡市千刈川

ダム覆う流木　盛岡

人間から一度切り、庭瀬川、庭瀬下野川の四十四田ダムと区市街の間所ダムは十八日、上流から流れ着いた流木やごみなどで水面が覆われた。両ダムとも七十七日の最大流入量が過去最高を記録、例年の何倍もの量の流木が一日にしてたまった形だ。流木をそのままにしておけばダムの機能に支障をきたすおそれもあり、ダムを管理する国交省北上川ダム統合管理事務所は撤去を急ぐ。

四十四田ダムは約3・9立方㍍の貯水池の手前ほとんど上流から流れてきた流木や木の枝、ごみで覆われた。現在はダムの手前に仮設されている流出防止ネットと出水ゲートへの流入を防いでいる。細部ダムも貯水池一面に木の枝やごみが目立つ。

流木などが出水ゲート、ゲートへ入ると、ゲートの開閉に支障をきたし、故障の原因になるという。また、下流に流すと河川敷を汚す原因にもなってしまう。

四十四田ダムへの十七日の最大流入量はダム完成以来最高の毎秒986立方㍍を記録、間所ダムの最大流入量も過去最高の毎秒2168立方㍍を記録した。

同管理事務所は、国の災害指定の判断などを待って流木の撤去作業を始める。流木の処理は、引き上げて乾燥させてからごみと分別するなど手間がかかる。今回は量が膨大なだけに、撤去には最低一、二カ月かかる見込みという。同事務所管理第二課の佐々木大貴担当課長は「軽く例年の一、三倍以上はありそうだ。人員はいつもの倍以上、業者は数千万円ではすまないだろう」と話す。

ダム未整備なら　洪水の可能性も

河川事務所が検証

十七日からの大雨報告を受け、国土交通省岩手河川国道事務所は十八日、ダム整備の効果を検証した。検証結果によると、盛岡市の四十四田ダムや間所ダムが整備されていなかった場合、盛岡市街地で甚大な洪水被害が発生していた可能性があると指摘している。

盛岡市の民宿地域周辺を対象に検証。十七日の観測水位は2・54㍍だった一方、同日は両ダムを通過した最大流入量を記録、ダムがなかった場合の水位は4・86㍍と推定された。同地点の氾濫水域の危険水位を示す計画高水位4・50㍍を大きく上回る。

明治橋付近は北上川と中津川の合流地点でもあり、急激に水位が上昇する危険性が高いという。住宅も密集しており、逃げ遅れた人が床上浸水した記録も残る。十七日夜は洪水警報に備え、土のう積みなどの水防活動も行われた。

岩手河川国道事務所の四塚一彦副所長は「ダム整備、緊急な水防活動で被害を最小限に抑えることができたと考えている」としている。

大雨対策で　2日間休会

花巻市議会

花巻市議会（佐藤忠男議長）は十八日、臨時の議会運営協議会を開き、大雨による災害対策を優先するため十八、十九の両日を休会とすることを決めた。市側も休会を提案していた。

当初は十八日に決算特別委員会、十九日に特別委員会を予定。今後は二十日に本会議を開き、災害状況に応じてその後の日程を決定する。

10校が休校

県央と県南を中心に公立学校にも大雨の影響が広がった。県教委によると十八日午後三時現在、盛岡市北上市などの六小学校、一中学校、盛岡市ろう学校が休校。県立高校八校で校時繰り上げるなどの措置を取った。花巻市の東和町では、グラウンドのり面の一部が土砂崩れするなどの被害が出た。

県私学協会によると、盛岡白百合学園小・中高が休校、岩手女子高と花巻東高で全校生徒の三一％弱が欠席したため午前中で授業を打ち切った。

龍泉洞が閉洞

地底湖水位が増水

岩泉町の観光名所の龍泉洞は大雨で河川の増水、道路が完全に水没したため十八日から閉洞した。閉洞期間は当面継続の見込み。

一関遊水地冠水被害

募る農家の苦悩

コンバイン 泥で故障続き 修理代の負担重く

営農継続に不安も 早期小堤完成、適切な補償が課題

九月の集中豪雨で冠水被害に遭った一関市と平泉町にまたがる一関遊水地で、稲に付着した泥によるコンバインの破損が深刻だ。農機具販売営業所などによると、供給したコンバインの二割以上（約三百台）が故障しているとみられ、最も高額な農機具・コンバインの修理代や稼働年数の短縮が農家に重くのし掛かる。農家からは今後の営農に不安の声が上がっている。

【供給したコンバインの3割以上が故障】

今回の冠水被害は、稲の収穫期直前に泥水に漬かったことが大きな特徴。収穫機械のコンバインが付着した粒子の細かい泥で、搬送チェーン、ギアなどで故障が目立った。

県南クボタ一関店は遊水地内の農家に供給したコンバイン三百八十九台中、約百三十台（三三％）を、JAいわて南農機センターは、約二百三十台中、八十六台程度（三七％）をそれぞれ修理した。ほかの販売店などを加えると遊水地内の圃場で稼働した約三百台以上が修理されたとみられる。

修理代は――二十四万円が中心で、中には百六十万円掛かるケースもあるという。

両事業所は「これほど修理が殺到した年はない」と振り返り、「今回、目立った故障がなくとも、細かく乾いた泥がベアリングをはじめ至る所に入り込み、次年度以降に影響が出てくる恐れが大きい。点検が必要」と注意を促している。

コンバインは一台約五百―七百万円。さらに大型のものは一千万円もする。法定耐用年数は五年だが「農家は十年以上使わなければ元が取れない。今回の被害で五年持たないものも多いだろう」（クボタ一関店）との見方が強い。農家にとって最も高額な農業機械の稼働年数短縮は〝機械化貧乏〟を通り越し、営農断念の引き金になりかねない。

【農家に広がる営農継続への不安】

米価下落とコンバインの破損は、農家に経済的な打撃ばかりでなく、肉体的、精神的なダメージも与えている。

一関第一地区担い手育成基盤整備事業施行委員会の佐藤功会長は「五十年間農業をしてきた中で、これほどひどい泥は初めて」と指摘した上で「米価が生産原価を割り込み、コンバインは故障続きで能率が上がらず本当に苦労した。地区内では『農業をやめたい』という声も出てきている」と語った。

同第二地区の農事組合法人「アグリ平泉」＝平泉町長島＝の佐々木正代表理事は「ありとあらゆるごみが圃場内に流れ込み、コンバインが故障続きで通常は一週間で終わる稲刈りが一カ月たっても終わらなかった」と話す。

同第三地区の農事組合法人アグリパーク舞川の小野正一専務理事は「地域の人たちから作業を受託している責任上、刈り遅れによる品質低下を避けるため、やむなく新たに購入した」と苦しい胸の内を明かす。

【小堤工事を急ぐも完成は30年代の見通し】

多くの農家が農地を守る小堤の完成を望んでいる中、国土交通省東北地方整備局は「一関遊水地は、北上川の治水対策上、大きな役割を果たしている。上流域の水をためることで、下流域の宮城県に迷惑を掛けることなく盛岡市や花巻市などの河川工事を担保しているからだ」と遊水地の重要性を強調。「周囲堤は概成しつつあるが、小堤は着工したばかり。平成三十年代の完成を目指している。小堤完成を急ぎたい」との姿勢だ。

【求められる補償システム】

今回の冠水被害で明らかになった課題は、安定的な遊水地農業確立のために小堤を早期に完成させることと、被害に対する適切な補償システムをつくることだ。

国交省も認めているように北上川流域全体の洪水被害を食い止めているのは一関遊水地。裏を返せば遊水地農業の犠牲の上に流域市町村が守られている。

補償システムも含めた遊水地農業の在り方の根本的議論を国交省、農水省、県、流域市町村が真剣に行うべき時期だ。

9月の冠水被害でコンバインに詰まった土ぼこりを動力散布機で除く一関遊水地の農家。稼働年数の短縮が危惧される

平成19年10月27日（土曜日）

岩手日報
夕刊
岩手日報社
盛岡市内丸3番7号
郵便番号 020-8505
電話(019)653-1111
振替口座盛岡2-12007

（6面）

平成１９年１１月２日（金曜日）

岩手日報
夕刊
岩手日報社
盛岡市内丸3番7号
郵便番号 020-8505
電話(019)653-1111
振替口座盛岡2-12007

（６面）

【産経新聞 平成19年 11月15日(木曜日) 27面】

豪雨被害 数十分の一に

北陸から東北に大きな被害をもたらした9月中旬の集中豪雨。岩手県内では北上川の上流域で200ミリを超す大雨が降り、川沿いの民家など約400戸が浸水被害を受けた。国土交通省岩手河川国道事務所によれば、被害総額は復旧費を含めて数億円を上回る見込みだが、ダムや堤防、遊水地などがなかったら、被害は約35倍、3000億円を超えた可能性があるという。(石川隆司)

発達した秋雨前線による今回の大雨で、岩手県では県北部から北西部の奥羽山系にかけて降雨量200～300ミリ超の降雨量を記録。雨は北上川へ流れ込んだ。

岩手河川国道事務所によると、盛岡市中心部の流域面積約1300平方キロの北上川上流域では、9月17日からの2日間の平均降雨量が観測史上の201ミリを観測。盛岡、花巻市を中心に北上川の左支流域では、約585戸の家屋が床上浸水あるいは床下浸水した。被害は堤防が十分整備されていない川沿いに集中し被害総額は復旧費やふくめ約90億円に上ると推定している。

同事務所はダムや堤防がなかった場合の被害のシミュレーションを行った。これによると、浸水家屋は1万7400戸、被害総額は約3180億円だった。これには土木施設や農林水産業の被害は含めておらず、被害は数十分の一に抑えられた計算という。

今回の大雨で、文字通り"防波堤"の役割をはたしたのが北上川支流の雫石川の御所ダム(盛岡市郊)と北上川上流の西和賀町の西和賀ダム(盛岡市下河目)。

御所ダムには最大で約2100トンの雨水が流入。これに対し放水量を毎秒約1112トンに抑え、中・下流域への急激な増水を防いだ。ダム湖面の最高水位は満水貯水時(182.2メートル)まで約2メートルの180メートルに達した。

西和賀ダムでは、ピーク時に毎秒368トンの雨水が流入。放水は最大でも毎秒574トンに抑え、水位は164.7メートル(満水貯水時171メートル)にとどまった。

国交省北上川ダム統合管理事務所の流域大雨調査班は「西和賀ダムはまさに間一髪に合格があったが、御所ダムはぎりぎりだった。やはり盛岡は山でおよそ50ミリ以上の降雨量があったら、両ダムと堤防がなければ危なかった」と振り返る。

降雨量がさらに増えれば、ダムの機能を防ぐために流入量と同じ水量を放流することになる。そうなれば「盛岡市内で中規模は、さらに広がったと思う」とみている。

集中豪雨で流入した大量の雨水をこらえる西和賀ダム(9日、盛岡市(岩手県西和賀町提供))

ダム、遊水地効果 未整備区間が課題

下流の一関市、平泉町に造成した一関遊水地(1450ヘクタール)も、被害の拡大を防ぐのに一役買った。一関市用塩の降雨量は50ミリに満たなかったが、上流部からの異常出水で一関遊水地はいっぱいに。部を除いて全壊であった。収穫間近の稲など農作物の被害に悩まされ被害を受けた。岩手河川国道事務所では浸水した農家からの多くの苦情が寄せられ職員は対応に追われた。

しかし、盛岡市の民家の浸水被害は皆無にとどまった。家屋の被害に対しては計画通りの治水機能を発揮したといえる。

宮城県栗駒ダム(栗駒市北郷区)の「これまでの事業費約1300億円を含め、堤防、北上川の治水事業に投じられた事業費・維持費は計約4750億円にのぼる。

ダム建設には、巨額な費用に見合うのかという批判や、環境破壊への懸念の声がある。だが「今回の大雨は40年に1度の災害規模。被害が90億円にとどまったのは、昭和22年のカスリン台風、23年のアイオン台風災害を機に建設された30年にわたるダム建設や堤防の成果」と同事務所の担当者は説明する。

全長約280キロの北上川のうち、河川改修の進捗率は100%が完整備だ。山崎所長は「できるかぎり早く整備し、万全を期したい」と話している。

国交省の集中豪雨による岩手県内の被害集のまとめによると、死者2人、家屋の一部破壊3棟、床上浸水98棟、床下浸水440棟。家屋以外では、河川287カ所、道路130カ所など土木施設の被害が約57億6200万円にのぼった。農地農業用施設でも、用水路、堤防など227カ所と、約3000ヘクタールの広範で農作物に被害がおよび、農業関係だけで約17億700万円。このほか、林業関係で約2億200万円、水産関係で約950万円の被害があった。